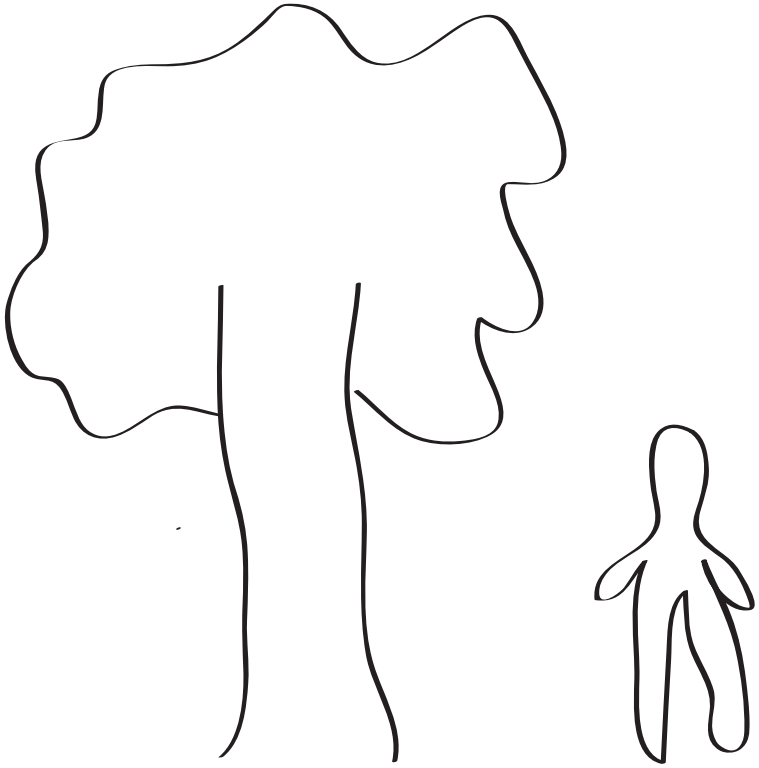
# Deep Ecology



Masashi SUGAI
Miyako CHIBA
Natsuko KASAHARA
Satomi SHIRAKAWA

MORIMURA SEMINAR 2009

## 0.はじめに

今回私たちは「ラディカル・エコロジー」の第四章「ディープ・エコロジー」を扱います。文献内では、ディープ・エコロジーの諸原理、それに対する批判を取り上げながら筆者であるキャロリン・マーチャントは結論としてその両者の折衷案をうちだした。その中では自然と人間が「平等・対等」であるべきだとしきりに書かれている。そこで平等・対等という定義をもう一度考え直し、自然と人間がどのような立場で共生していくべきなのかを考えていきたい。

## 1. ディープ・エコロジー・パラダイムの確立への努力
### ～新しいエコロジカルなパラダイム～

1970～1980 年代の環境改革主義
環境問題の解決を政策や経済で解決する問題として捉える　ex）環境汚染・資源の枯渇
⇒人間と自然の関係は人間中心的
⇒結果として人間に都合のいい、利益をもたらす　機械的パラダイム

■ディープ・エコロジーの名前とアプローチ
哲学者　アルネ・ネス　“浅いエコロジー運動と、射程の長い深いエコロジー運動”(1972)に由来する
⇒人間と自然との関係・在り方から根本的に変える

■『ディープ・エコロジー』(1985)
ビル・デヴォール、ジョージ・セッションズ、ミカエル・トービアスによって公刊
⇒現在では全てのエコロジー運動を正当化するもの

【ディープ・エコロジーの諸原理】
・人間＝他の生物　平等レベルに置く
・人格と惑星との全面交流を目指す
・新たな人間学の展開(産業社会の拒否）⇒必然的に広大な土地を野生へと本来の姿に戻す
・生態系中心な倫理　⇒人間は生態圏を傷つけてはならない義務
・自然の中に人間が存在しているという意識を促す（古代のシャーマンから手掛かりを得る）

■フリチョフ・カプラの努力

・物理学者

・『タオ自然学』『ターニング・ポイント』

・「すべての自然のシステムは全体的なものであり、それぞれのシステムの特殊な構造はその諸部分の相互作用と相互依存から生じる」

⇒人間を環境から切り離さない

生命圏の平等を中心とし、自然に対する意識の改革

## 2.ディープ・エコロジーに対する批判

ディープ・エコロジーの批判点を2つ

1.　政治的な批判の欠如

・「生命圏のすべての存在は生存のための平等な権利を有するという観念」
　→「平等な権利」自体が人間中心文化の産物

・「野性と人間中心主義を峻別するディープ・エコロジストは、人間もまた動物であると考えることができない。」
　→人間を自然の一部であると考えていない。

・「多くのディープ・エコロジストがマルサス主義的前提を受け入れている。」
　→上に同じく、人間を自然の一部と考えていない。

※ディープ・エコロジスト的な転換より、社会的な転換が必要である。

2.　カプラへの批判

・文化をある価値観の反映として、行動の鍵へと理想化しすぎている。

・カプラは価値観が、時間がたつにつれ変化すると仮定するが、価値観は政治的闘争に無関係ではない。

☆結局人間中心的にならざるをえないのでは？ディープ・エコロジスト的な自然との共生は可能か？人間と自然との平等な関係とはどういうことなのか？

## 3.共生への歩み

■　ディープ・エコロジーの主張する「平等」

「　自然　⇔　人間　」という考えではなく、人間は自然に内包されている。
　　→人間と他の生物に優劣はないという考え
　　→全体のバランスが保っていること

■　「平等」に対する考え

何をもって、「平等」と言えるのか
　→権利における平等　or　機能における平等

　　・権利における平等
　　→ある種の不平等さによって、世界を保っている
　　（ex）貧富格差

　・機能における平等
　　→各々にできること（＝役割）は違う

■　補い合うことで成り立つ「平等」

人間と自然は、同じフィールドで「　平等　」になることは難しい
　→お互いの欠点部分を補い合うことで

Q. では、人間の役割とは何か？
　A. 事象から予期し、次に何をすればよいか「考えられること」
　　→人間の進歩だけに使っていた　…このツケが今、きている

“人間”として、自然に対して「　何ができるか？　」を考えることが大事
　　→還元主義的な考え

⇩

**共生への歩み**

**4.考察**

「社会的運動を通じて協力しあい、真に平等主義的でエコロジカルな社会を創出することができるだろう。たぶんその時には対等なパートナーとして自然がその傷を癒されるだろう。」と結論に書かれている。だが、3の平等で述べたように、自然と人間の間には圧倒的な違いがあり、役割がある。人間は自然の中で生きているが、自然と同じ立場ではない。それを同じ尺度で「平等・対等」と括ることが必ずしも自然と人間が「キョウセイ」することになるとは思わない。自然と人間がどのような関係性であれ、大切なことは各々の役割、特性を活かして付き合っていくことである。

人間は生活のために自然を破壊している。もちろんそれはディープエコロジストが痛罵している通り、人間中心主義を推し進めてきたことが原因であろう。しかし私たち人間は今更「未来の原始人」になることなどできない。これまで人間は自分たちの都合のみで自然を利用してきた。しかしこれからは一歩的に使用するだけではなく、人間が自然に対して何ができるかを考え、キョウセイしていくべきではないか。では、具体的にどんな風に自然に歩み寄れるだろうか。このことを議論で話し合っていきたい。

MEMO